

近年の国際大会におけるスポーツ選手のドーピングの問題に関する一考察

A study on the issue of doping athletes in international competition in recent years

1K07B233-0 若林 幸太

指導教員 主査 友添秀則先生 副査 宮内孝知先生

【目的】

私は中学校から大学まで、長い期間に渡り陸上競技を主としてスポーツと関わり続けている。しかし、近年のオリンピックや世界選手権等の国際大会ではしばしばドーピング発覚による試合出場停止処分や獲得したメダルの剥奪のニュースがメディアを通じて報道され、世間を騒がせている。

2004 年のアテネオリンピックでは、陸上競技男子ハンマー投げで優勝したハンガリーの選手のドーピング発覚により、日本の室伏広治選手が大会後に繰り上げ優勝となる事例が起きている。

また、国際大会に限らず、学生スポーツの身近な例を挙げると、東京箱根間往復大学駅伝競走（箱根駅伝）の競技終了後に各大学の出場選手に対し、無作為に何名かを選びドーピング検査を実施するという現状である。

このように近年のスポーツとドーピングは切っても切り離すことが出来ないものとなってしまうている。最近の国際的な動きとしては、1999 年の世界アンチ・ドーピング機構設立、日本では 2001 年に財団法人日本アンチ・ドーピング機構が設立されるなど、アンチ・ドーピングへの取り組みは進んでいる。

しかし、アンチ・ドーピング活動が重要視され、ドーピングへの検査や防止の取り組みが進んでいるにも関わらず、依然として問題解決には至っていないと言えない。

私は社会におけるドーピングの問題を知り、ドーピングがスポーツ界にこのまま普及してしまえば、世界記録などの更新とは裏腹に、スポーツそのものが衰退へと向かってしまうことを危惧している。

そこで本研究では、ドーピングの歴史や、ドーピングがなくならない社会的要因、ドーピングが選手に与える悪影響を取り上げ、ドーピングを批判的に考察することを目的とする。

【方法】

本研究は過去から現在までのドーピングに関する文献を参考に行う文献研究である。また、WADA や JADA のドーピングに対する取り組みを調べる為、WADA や JADA、加えて IOC や JAAF のホームページなどのインターネット上の文献、過去の新聞の記事も参考文献として用いて考察を行うこととする。

【結果】

ドーピングの起源は古く、古代ローマ時代に既に行われており、現在までに様々な方法が存在している。ドーピング違反は大きく分けると、本人の意思で行う違反と、本人の意思とは関係なくいわゆる過失によって禁止薬物を服用し、違反となってしまう二つがあることが分かった。日本人選手の場合、本人の意思で行うドーピングは少なく、「うっかり」ドーピングが発覚することが多い。これは風邪薬などに禁止薬物が含まれていることを知らずに服用してしまった場合がほとんどである。

スポーツ界のドーピング問題を世間に知らしめることとなったソウルオリンピック男子陸上競技 100m のベン・ジョンソンの 9 秒 79 という記録は当時からすれば驚異的な記録であり、薬物ドーピングがいかにか大きな効果を持つかということを示している。

また、薬物ドーピングを行った選手は、その副作用により、身体に障害が出ること、発覚した場合は競技団体から資格停止などの厳しい処分が下るなど大きなリスクを負うことになることが明らかとなった。

【考察】

ドーピングを行う背景には、生活を営むのに必要な金銭を得るという目的が非常に強く、この課題解決が今後のドーピング解決への壁となる。勝利によって選手は巨額の金銭を得ることに繋がるが、ドーピングによって選手が負うリスクを考えれば安易にドーピングに手を出すことができない。

国際大会で活躍するトップ選手が、ドーピング撲滅に積極的に協力できる活動、これに加えて選手個人がドーピングへの今以上の関心を持つこと、注意を向ける為の支援がこれからの活動に必要である。

現在ドーピング撲滅に向けて、アンチ・ドーピング機関が中心となって活動を行っているが、まだまだ十分とは言える状況ではない。アンチ・ドーピング機関という存在は抑止力となることができるが、やはり現在の機関の活動だけでは力不足を感じる。この為、社会に対して影響力のあるスポーツ界のトップ選手たちが積極的に撲滅に協力する体制作り、更には社会全体でドーピング問題解決に向けた環境づくりが必須となる。